

社会福祉系大学新入生の実態と初年次教育

著者	志水 幸, 山本 加奈子, 池森 康裕
雑誌名	北海道医療大学看護福祉学部紀要
号	16
ページ	25-33
発行年	2009-12-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00006283/

社会福祉系大学新入生の実態と初年次教育

志水 幸*¹, 山本 加奈子*², 池森 康裕*¹, 志水 朱*¹, 佐藤 園美*¹

抄録：社会福祉系大学の初年次教育の在り方に資するべく、社会福祉系大学新入生を対象とし、その学習活動・学生生活等の実態調査を行った。本研究では、その一例としてH大学新入生に焦点をあて、調査結果をもとに、初年次教育の在り方を以下のように考察した。

1. 「文章を書く能力」不足や「予習・復習の進め方」への不安に対するスタディ・スキルの教育、2. 「卒業後の進路の明確化」と「専門教育学習への動機づけ」、「主体的な学習活動」等のスチューデント・スキルの教育、3. 「コミュニケーション能力」向上、「利用者の理解」等の専門教育への橋渡しとしての基礎的知識・技能の教育である。さらに初年次教育プログラムを展開する上で、教員のFDの推進も必要である。

キーワード：初年次教育、学習活動、学生生活

I 緒言

平成21年度速報¹⁾では、大学等への進学率が53.9%という過去最高を記録し、「進学ユニバーサル化」²⁾がますます進行している。また大学等への入学志願者数と入学人数が一致する「全入時代」がおよぼす影響として、大学生の学力低下や多様化が問題視されるようになり、こうした時代の流れへの対応として、わが国でも大学における初年次教育が注目されるようになってきている。

初年次教育とは、「高校（と他大学）からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主に大学新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」と定義されている³⁾。初年次教育への取り組みを明らかにした2001年の学部長調査⁴⁾では、全体の80.9%が初年次教育を実施し、学部系統別では、理系（86.7%）、社会系（84.9%）で実施率がやや高いという報告もなされている。こうした初年次教育への関心は、保健・医療・福祉に携わる専門職を養成する大学においても認められてきている⁵⁾⁶⁾⁷⁾。社会福祉系大学においても例外ではなく、川廷（2006）は、社会福祉専門職養成教育における現状と課題について、①社会福祉専門職養成教育の初年次教育を受ける学生の実態およびニーズ把握、②社会福

祉専門職養成教育の初年次教育の目的と方法、③社会福祉専門職養成教育の初年次教育の内容と方法の3点を指摘している⁸⁾。また社会福祉教育実践研究会（以下、研究会）では、社会福祉専門職養成校における初年次教育の役割および重要性に着目し、初年次教育プログラム開発の予備的研究⁹⁾に取り組んだ。本研究は、研究会が実施した社会福祉系大学生の実態調査である「生活体験および学習活動と学生生活に関するアンケート調査」をもとに、一例としてH大学新入生の実態を報告し、社会福祉系大学の初年次教育の在り方を考察することを目的とする。

II 研究方法

本研究は、自記式質問紙票を用いた集合調査法によるアンケート調査を採用し、以下の要領で実施した。

1. 調査対象および期間

調査対象は、研究会の研究プロジェクト参加者の勤務校である4年制大学10校（H大学を含む）、短期大学3校の新入学生とした。調査期間は2009年4月。研究プロジェクト参加教員の担当する授業の時間を利用し、学生に十分な事前説明を行ったうえで実施した。

2. 調査内容

調査内容は、1) 基本属性や入試形態に関する3項

* 1 北海道医療大学看護福祉学部

* 2 北海道医療大学大学院看護福祉学研究科

目、2)生活体験に関する7項目、3)現在の学生生活や所属する学部・学科についての意識18項目、4)学習活動や成長に関する15項目、5)自身に対する理解に関する24項目、6)社会人基礎力に関する12項目、7)職業観などに関連する6項目の、計85項目を設定した。なお、本研究は仮説探索型の研究のため、仮説の検証を目的とした調査項目の組み立ては行っていない。

3. 集計方法

研究会の研究プロジェクト参加者による一括入力データを活用し、Microsoft Excelを用いて、H大学および比較対象として、他の4年制大学9校分のデータを単純集計した。4件法で回答させている質問については、該当群と非該当群に2分化し、該当群の割合を結果に示した。そして学校別、性別の4群に分け、回答の割合を比較した。本研究では、H大学男女間における割合が±10%以上の差があった項目、同性間でH大学とその他の4年制大学にて±10%以上の差があった項目について整理を行った。

III 結 果

H大学の調査対象者は68名、うち男子34名(50.0%)、女子34名(50.0%)。比較対象となる他の4年制大学9校における調査対象者は966名、うち男子326名(33.7%)、女子640名(66.3%)であった。

1. 性別および入試形態

表1に性別の入試形態の割合を示した。

H大学では、男女ともに一般入試およびセンター入試という学力試験を経て入学している学生が約6割である。他の4年制大学との比較においては、本学の男女ともに学力試験を経験して入学している者の割合が高かつ

表1 入試形態

入試区分	N (%)					
	H大学			他4年制大学		
	男子 N=34	女子 N=34	計	男子 N=326	女子 N=640	計
一般入試	12 (35.3)	19 (55.9)	31 (45.6)	87 (26.9)	180 (28.3)	267 (27.6)
センター	9 (26.5)	4 (11.8)	13 (19.1)	29 (9.0)	52 (8.2)	81 (8.4)
AO入試	7 (20.6)	6 (17.6)	13 (19.1)	78 (24.1)	166 (26.1)	244 (25.3)
推薦入試	6 (17.6)	5 (14.7)	11 (16.1)	105 (32.4)	199 (31.3)	304 (31.5)
その他	0 (0)	0 (0)	0 (0)	25 (7.7)	38 (6.0)	63 (6.5)

た。

2. 大学入学前の生活体験

表2に性別の大学入学前の生活体験の割合を示した。

H大学男女間では「自主ボランティアの経験あり」(男子47.1%、女子32.4%)、「個人的で深刻な相談を、家族以外や友人以外(先生や専門機関など)へ相談した経験あり」(男子58.8%、女子39.2%)、「福祉」に関する学習経験あり」(男子61.8%、女子48.5%)の項目において差が見られた。男子間の比較では、「個人的で深刻な相談を、家族以外や友人以外(先生や専門機関など)へ相談した経験あり」(H大学男子58.8%、他4年制大学男子48.1%)、女子間では「学内ボランティア経験あり」(H大女子55.9%、他4年制大学女子69.7%)、「自主ボランティアの経験あり」(H大女子32.4%、他4年制大学女子54.6%)、「アルバイトの経験あり」(H大女子44.1%、他4年制大学女子67.4%)、「個人的で深刻な相談を、家族以外や友人以外(先生や専門機関など)へ相談した経験あり」(H大女子39.2%、他4年制大学女子51.0%)、「人間関係にひどく苦しめられた経験あり」(H大女子61.8%、他4年制大学女子75.5%)、「福祉」に関する学習経験あり」(H大女子48.5%、他4年制大学女子66.8%)の項目において差が見られた。

3. 現在の学生生活および所属する学部学科についての意識

表3に現在の学生生活および所属する学部・学科についての意識の割合を示した。

H大学男女間で差があった項目は、「現在在籍してい

表2 大学入学前の生活体験

質問項目	N (%)			
	H大学		他4年制大学	
	男子 N=34	女子 N=34	男子 N=326	女子 N=640
学内ボランティア	20 (58.8)	19 (55.9)	201 (61.7)	442 (69.1)
自主ボランティア	16 (47.1)	11 (32.4)	167 (51.2)	349 (54.5)
アルバイト	15 (44.1)	15 (44.1)	160 (49.1)	350 (54.7)
教員や専門機関へ相談した	20 (58.8)	11 (39.2)	165 (50.6)	326 (50.9)
他者からの相談を受けた	24 (70.6)	27 (79.4)	219 (67.2)	519 (81.1)
人間関係に苦しめられた	21 (61.8)	21 (61.8)	182 (55.8)	482 (75.3)
「福祉」に関する学習	21 (61.8)	16 (48.5)	208 (63.8)	425 (66.4)

表3 現在の学生生活および所属する学部・学科についての意識

質問項目	H大学		他4年制大学	
	男子 N=34	女子 N=34	男子 N=326	女子 N=640
学部・学科は性格に合っている	28 (82.4)	29 (85.3)	300 (92.0)	588 (87.2)
学部・学科は興味・関心に合っている	29 (85.3)	30 (88.2)	297 (91.1)	608 (95.0)
学部・学科は能力をいかせる	23 (67.7)	26 (76.5)	262 (80.4)	515 (80.5)
学部・学科は得意科目をいかせる	10 (29.4)	12 (35.3)	119 (36.5)	235 (50.8)
学部・学科で希望の職業に就ける	21 (61.8)	29 (85.3)	273 (83.7)	526 (82.2)
学んでいることは生き方につながる	27 (79.4)	27 (79.4)	270 (82.8)	570 (89.0)
学生生活は「さびしい」	5 (14.7)	12 (35.3)	88 (27.0)	224 (35.0)
知人とうまくやっていく自信がない	3 (8.8)	10 (29.4)	68 (20.9)	136 (21.3)
平等に扱う雰囲気がある	21 (61.8)	27 (79.4)	254 (77.9)	525 (82.0)
教員は学生を尊重している	24 (70.6)	30 (88.2)	237 (72.7)	510 (79.7)
学生の意見を取り入れる仕組みがある	23 (67.6)	28 (82.4)	243 (74.5)	488 (76.3)
社会への関心がある	24 (70.6)	26 (76.5)	216 (66.3)	419 (65.5)

る学部・学科では自分の能力をいかすことができる」(男子67.7%、女子82.4%)、「現在在籍している学部・学科で、希望する職業に就けると感じる」(男子61.8%、女子85.3%)、「今の自分の学生生活は「さびしい」と感じる」(男子14.7%、女子35.3%)、「この大学に入ってから知り合った人とうまくやっていく自信がない」(男子8.8%、女子29.4%)、「この大学には、どの学部・学科学生でも平等に扱う雰囲気がある」(男子64.7%、女子79.4%)、「この大学の教員は、この大学の学生を尊重していると感じる」(男子70.6%、女子88.2%)、「この大学には、教育方法や学習環境などについて、学生の意見を取り入れる仕組みや機会があると感じる」(男子67.6%、女子82.4%)であった。男子間では、「現在在籍している学部・学科は自分の性格に合っている」(H大学男子75.0%、他4年制大学男子92.0%)、「現在在籍している学部・学科では自分の能力をいかすことができる」(H大学男子67.7%、他4年制大学男子80.4%)、「現在在籍している学部・学科で、希望する職業に就けると感じる」(H大学男子61.8%、他4年制大学男子83.7%)、「今の自分の学生生活は「さびしい」と感じる」(H大学男子14.7%、他4年制大学男子27.0%)、「この大学に入ってから知り合った人とうまくやっていく自信がない」(H大学男子8.8%、他4年制大学男子20.9%)、「この大学には、どの学部・学科学生でも平等に扱う雰囲気がある」(H大学男子64.7%、他4年制大学男子77.9%)で差が見られた。女子間では、「現在在籍している学部・学科は自分の性格に合っている」(H大学女子75.3%、他4年生大学女子91.9%)の1項目で差が見られた。

また普段の大学の授業以外での学習時間については、1日30分以上勉強するという回答はH大学男子39.4%、H大学女子44.1%、他4年制大学男子44.5%、他4年制

大学女子56.3%であった。1ヶ月の平均読書量(講義で義務付けられて読む本や教科書、マンガ本および雑誌以外)は、H大学男子3.09冊、H大学女子1.29冊、他4年制大学男子3.73冊、他4年制大学女子2.67冊であった。週平均のアルバイト時間は、H大学男子3.09時間、H大学女子1.70時間、他4年制大学男子5.34時間、他4年制大学女子5.69時間と、H大学学生のアルバイト時間が短かった。

これからの人生で身につけたいと思うもの(複数回答)は、4群に大きな差はみられず、「周囲の人への思いやり」「駅や街頭での適切な行動(社会生活のマナー)」「周囲の人たちと自分自身の権利を尊重する意識」の割合が高かった。

図1に学習活動を通して身につけたい能力を示した。H大学男女間に±10%以上の差が見られた項目は、「現状を分析する能力」(男子6.7%、女子17.7%)であった。男子間および女子間には±10%以上の差が見られた項目はなかった。

今の大学生活の不安(複数回答)においても、4群に±10%以上の差が見られた項目はなかった。共通して「授業の仕組み(単位制度や授業時間)」「履修科目の選

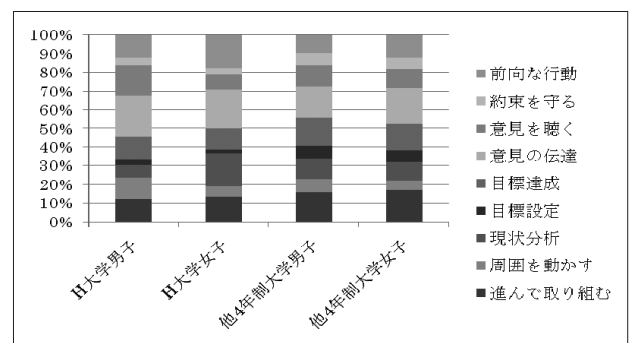


図1 学習活動を通し身につけたい能力

表4 学習活動や人間的成長に関して大切だと思うこと

質問項目	H大学		他4年制大学	
	男子 N=34	女子 N=34	男子 N=326	女子 N=640
先生へ学習上の質問をする	33 (97.1)	33 (97.1)	296 (91.0)	612 (95.6)
大学運営への学生の参画	29 (85.3)	27 (79.4)	266 (81.6)	582 (90.9)
先輩の話を聞く、相談する	33 (97.1)	33 (97.1)	291 (89.3)	604 (94.4)
他学部・学科学生との交流	29 (85.3)	31 (91.2)	262 (80.4)	559 (87.3)
現場の生の声を聞く	34 (100)	31 (91.2)	302 (92.6)	618 (96.6)
人間的にも魅力的な先生との出会い	31 (91.2)	32 (94.1)	280 (85.9)	602 (94.1)
何でも気軽に相談できる場	34 (100)	30 (88.2)	287 (88.0)	609 (95.2)
適度に困難な課題の提供	30 (88.2)	29 (85.3)	268 (82.2)	550 (85.9)
考えや価値観の異なる人との協働作業の機会	29 (85.3)	28 (82.4)	276 (84.7)	585 (91.4)
学習に関して尊重される機会	32 (94.1)	31 (91.2)	252 (77.3)	563 (88.0)

び方」「ノートの取り方」「予習・復習の進め方」「学費や生活費」が挙がっていた。

4. 学習活動や人間的成長に関する意識

表4に学習活動や人間的成長に関して大切だと思うことの割合を示した。

H大学男女では「大学の仕組みや学習上の事柄、生活のことなども含め、何でも気軽に相談できる場があること」(男子100%、女子88.2%)において差が見られた。男子間では、「大学の仕組みや学習上の事柄、生活のことなども含め、何でも気軽に相談できる場があること」(H大学男子100%、他4年制大学男子88.0%)、「学習に関して、自分が大切にされ、尊重されると感じられる機会」(H大学男子94.1%、他4年制大学男子77.3%)の2項目、女子間では「大学の運営・仕組み作りなどに学生が参画すること」(H大学女子79.4%、他4年制大学女子90.9%)であった。

図2に大学での学び方についての考えの傾向を示した。

H大学男女間では、「授業の意義や必要性を教えてほしい—授業の意義や必要性は自分で見出したい」、「授業

の中で必要なことは全て扱って欲しい—授業はきっかけで、後は自分で学びたい」、「専門以外のことも広く学びたい」において±10%以上の差が見られた。男子間では「専門以外のことも広く学びたい—専門分野を深く学びたい」において、H大学男子が専門分野を深く学びたい傾向があった。女子間では、「授業の意義や必要性を教えて欲しい—授業の意義や必要性は自分で見出したい」、「授業の中で必要なことは全て扱って欲しい—授業はきっかけで、後は自分で学びたい」に関して、H大学女子の方が、「授業の意義や必要性は自分で見出したい」、「授業はきっかけで、後は自分で学びたい」との割合が高かった。

5. 自身に対する理解

表5に自身に対する理解の割合を示した。

H大学男女間に差の見られた項目は、「友人に自分の意見やアドバイスをいつも伝えることができる」(男子79.4%、女子55.9%)、「教員に自分の意見や考えをいつも伝えることができる」(男子61.8%、女子41.2%)、「小グループの中で、他人の意見に左右されずに、自分の意見を言うことができる」(男子47.1%、女子58.8%)、「人とコミュニケーションをとるとき、状況や相手に応じた、適切な相手との距離や位置関係をとることができる」(男子67.6%、女子79.4%)、「締め切りのあるレポートなどの課題には計画的に取り組んでいる」(男子50.0%、女子61.7%)、「月末になって、お金が足りなくなることもある」(男子58.8%、女子32.4%)、「インターネット上で見つけた事柄をレポートなどに利用する場合には、内容の真偽の程度や情報の新しさを検討している」(男子67.6%、女子44.1%)、「自分のノートは、試験前になって開いても十分に内容が分かるようにまとめられている」(男子50.0%、女子64.7%)の7つであった。男子間では、「教員からのアドバイスを素直に受け入れ

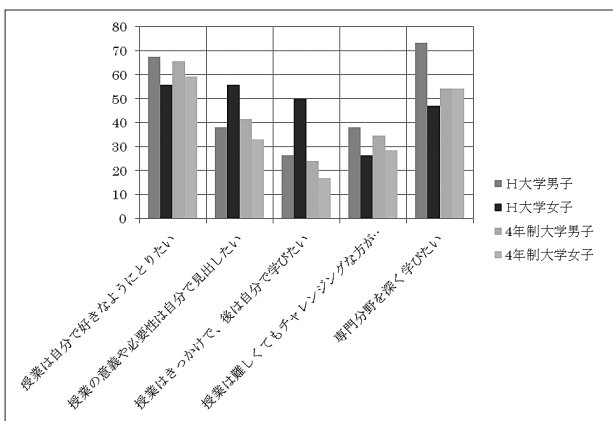


図2 大学での学び方についての考え

表5 自身に対する理解

質問項目	N (%)			
	H大学		他4年制大学	
	男子 N=34	女子 N=34	男子 N=326	女子 N=640
家族のアドバイスを受け入れる	28 (82.4)	28 (82.4)	243 (74.5)	488 (76.3)
教員のアドバイスを受け入れる	33 (97.1)	32 (94.1)	283 (86.8)	545 (85.1)
友人のアドバイスを受け入れる	34 (100)	34 (100)	286 (87.7)	586 (91.6)
友人に自分の意見を伝えられる	27 (79.4)	19 (55.9)	237 (72.7)	452 (70.6)
家族に自分の意見を伝えられる	27 (79.4)	26 (76.5)	223 (68.4)	456 (71.3)
教員に自分の意見を伝えられる	21 (61.8)	14 (41.2)	253 (77.6)	277 (43.3)
必要な時に苦手な人と話せる	22 (64.7)	22 (64.7)	234 (71.8)	471 (73.6)
意見の合わない人の話を聞ける	26 (76.5)	29 (85.3)	244 (74.8)	536 (83.8)
小グループの中で意見を言える	16 (47.1)	20 (58.8)	192 (58.9)	350 (54.7)
場の空気を読んで話せる	20 (58.8)	20 (58.8)	209 (64.1)	437 (68.3)
社会のルールや約束を守る	31 (91.2)	30 (88.2)	290 (88.9)	576 (90.0)
相手に応じた話し方をしている	27 (79.4)	24 (70.6)	252 (77.3)	508 (79.4)
話す時適切な身体動作ができる	24 (70.5)	25 (73.5)	199 (61.0)	474 (74.1)
相手に応じた適切な距離をとれる、	23 (67.6)	27 (79.4)	228 (69.9)	499 (78.0)
学外に相談できる友人がいる	31 (91.2)	31 (91.2)	267 (81.9)	559 (87.3)
自分のことが好きである	11 (32.4)	12 (35.3)	138 (42.3)	220 (34.4)
課題に計画的に取り組む	17 (50.0)	21 (61.7)	174 (53.3)	360 (56.3)
月末にお金が足りなくなる	20 (58.8)	11 (32.4)	167 (51.2)	330 (51.6)
急な訪問でも部屋が片付く状態	25 (73.5)	28 (82.4)	239 (73.3)	392 (61.3)
偏食を続ける、暴飲暴食がある	13 (38.2)	13 (38.2)	121 (37.1)	299 (46.7)
授業時間等、時間の約束を守る	25 (73.5)	25 (73.5)	243 (74.5)	521 (81.4)
ネット利用時、内容を検討する	23 (67.6)	15 (44.1)	174 (53.4)	315 (49.2)
分からない言葉を調べる	15 (44.1)	14 (41.2)	165 (53.3)	279 (43.6)
ノートがまとめられている	17 (50.0)	22 (64.7)	135 (41.4)	317 (49.5)

る」(H大学男子97.1%、他4年制大学男子86.8%)、「友人からのアドバイスを素直に受け入れる」(H大学男子100、他4年制大学男子87.7)、「家族に自分の意見や考えをいつも伝えることができる」(H大学男子79.4%、他4年制大学男子68.4%)、「教員に自分の意見や考えをいつも伝えることができる」(H大学男子61.8%、他4年制大学男子77.6%)、「小グループの中で他の人の意見に左右されずに、自分の意見を言うことができる」(H大学男子47.1%、他4年制大学男子58.9%)、「インターネット上で見つけた事柄をレポートなどに利用する場合には、内容の真偽の程度や情報の新しさを検討している」(H大学男子67.6%、他4年制大学男子53.4%)であった。女子間については「友人に自分の意見やアドバイスをいつも伝えることができる」(H大学女子55.9%、他4年制大学女子70.6%)、「月末になって、お金が足りなくなることがある」(H大学女子32.4%、他4年制大学女子51.6%)、「ひとが急に訪ねてきても、少し片づければ部屋に入ってもらえる」(H大学女子82.4%、他4年制大学女子61.3%)、「自分のノートは、試験前になって開いて

も十分に内容が分かるようにまとめられている」(H大学女子64.7%、他4年制大学女子49.5%)の項目であった。

6. 現在の自分に身につけている能力についての意識

表6に、現在の自分に身につけている能力についての意識を示した。

H大学男女間に10%以上の差があった項目は、「現状を分析する能力」(男子55.9%、女子26.5%)、「目標を設定する能力」(男子58.8%、女子73.5%)、「自分の意見をわかりやすく伝える能力」(男子35.3%、女子8.8%)、「社会のルールや人との約束を守る能力」(男子76.5%、女子88.2%)、「人間関係のストレスを感じても前向きにとらえて行動する能力」(男子55.9%、女子29.4%)、「問い続け、深く考える能力」(男子47.1%、女子29.4%)、「自分の生活を管理する能力」(男子41.2%、女子55.9%)であった。続いて、男子間で差が見られた項目は、「文章を書く能力」(H大学男子14.7%、他4年制大学男子29.8%)、「自分の生活を管理する能力」(H大学男

表6 現在の自分に身につけている能力についての意識

質問項目	N (%)			
	H大学		他4年制大学	
	男子 N=34	女子 N=34	男子 N=326	女子 N=640
物事に進んで取り組む能力	17 (50.0)	14 (41.2)	142 (43.6)	273 (42.7)
目標に向け周囲の人たちを動かす能力	8 (23.5)	9 (26.5)	93 (28.5)	128 (20.0)
現状を分析する能力	19 (55.9)	9 (26.5)	181 (55.5)	304 (47.5)
目標を設定する能力	20 (58.8)	25 (73.5)	185 (56.7)	374 (58.4)
設定した目標を達成する能力	13 (38.2)	12 (35.3)	110 (33.7)	233 (36.4)
自分の意見を分かりやすく伝える能力	12 (35.3)	3 (8.8)	103 (31.6)	175 (27.3)
相手の意見を丁寧に聴く能力	22 (64.7)	25 (73.5)	225 (69.0)	475 (74.2)
社会のルールや人との約束を守る能力	26 (76.5)	30 (88.2)	267 (81.9)	560 (87.5)
ストレスを前向きに捉え行動する能力	19 (55.9)	10 (29.4)	191 (58.6)	321 (50.2)
問い続け、深く考える能力	16 (47.1)	10 (29.4)	152 (46.6)	271 (42.3)
文章を書く能力	5 (14.7)	5 (14.7)	97 (29.8)	184 (28.8)
自分の生活を管理する能力	14 (41.2)	19 (55.9)	173 (53.1)	339 (53.0)

子41.2%、他4年制大学男子53.1%)であった。女子間では、「現状を分析する能力」(H大学女子26.5%、他4年制大学女子47.5%)、「目標を設定する能力」(H大学女子73.5%、他4年制大学女子58.4%)、「自分の意見をわかりやすく伝える能力」(H大学女子8.8%、他4年制大学女子27.3%)、「人間関係のストレスを感じても前向きにとらえて行動する能力」(H大学女子29.4%、他4年制大学女子50.2%)、「問い続け、深く考える能力」(H大学女子29.4%、他4年制大学女子42.3%)、「文章を書く能力」(H大学女子14.7%、他4年制大学女子28.8%)となった。

7. 職業観についての意識

対人援助専門職にどのような「人間性」が必要か(複数回答)においては、4群とも「思いやり・優しさがあること」「責任感があること」「誠実で安心感を与える人柄」の度合が高かった。H大学男女間では、「責任感があること」(男子10.9%、女子22.1%)において差が見られた。対人援助職に求められる「実践能力」では、4群に大きな差はなく、共通して「緊急時の臨機応変な対応能力」「利用者や生徒の気持ちを理解する力」の度合が高かった。

IV 考 察

初年次教育とは、前述したように「高校と(他大学)からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主に大学新生を対象に総合的につくられた教育プログラム」である。この定義で議論となるのが、何をもち「学問的・社会的な諸経験」の“成功”と言える

のかということである。ここでの“成功”とは、「知力および学力の育成、・人間関係の確立と維持、・アイデンティティの発達の探求、・職業の決定、・健康状態の維持、・信念と人生における精神性の検討、・多文化に対する認識の涵養、・市民としての責任感の涵養のうち一つ以上を含むもの」¹⁰⁾とされている。この成功を実現化するために、山田(2007: vii)は、「具体的には、(1)スタディ・スキル(一般的なレポート・論文の書き方や文献の探し方、コンピュータ・リテラシー)の教育、(2)進路への明確な動機づけを含むスチューデント・スキル(大学生に求められる一般常識や態度)の教育、(3)専門教育への橋渡しとなるような基礎的知識・技能の教育の三つの側面である。さらに、教育課程外での初年次生を支援するオリエンテーション・プログラムや課外活動支援プログラム、その他の初年次生を対象としたプログラムも初年次教育プログラムとして位置づけることもできる。」¹¹⁾と述べている。この初年次教育プログラムの具体的内容とH大学新生の実態調査結果より、H大学新生の初年次教育の在り方について考察を行う。

まず(1)スタディ・スキルの教育の在り方である。調査結果より、男女の共通項として「文章を書く能力」の不足を認識していること、女子において「インターネット上で見つけた事柄をレポートなどに利用する場合には、内容の真偽や情報の新しさを検討している」意識が低く見られたことから、初年次にレポート課題や情報処理等のプログラムを通じて、文章作成のスキル、コンピュータ・リテラシーの習得をさせる必要があると考えられる。その他、大学生活での不安要素として「ノートの取り方」、「予習・復習の進め方」が挙げられていることから、TAなどを活用し、学生を直接指導するような個別

対応が求められるだろう。

続いて(2) スチューデント・スキルに関するものである。現在の学生生活および所属する学部・学科についての意識では、男子において、「自分の能力を生かすことができる」、「希望の職につける」と回答するものが6割ほどに留まり、将来就きたい職業が必然的に社会福祉専門職と結び付かないことが明らかになった。このような学生が専門職養成プログラムを受講していくためのモチベーションを強化するために、初年次において進路への明確な動機付けを達成できるようなプログラムが求められよう。例えば、卒業生から進路についてアドバイスを得られるよう、新入生と卒業生の交流の場などを設けるという取り組みが考えられる。また大学での学び方についての考えにおいて、男子は「授業の中で必要なことはすべて扱って欲しい」のに対し、女子は「授業はきっかけで、後は自分で学びたい」という傾向が見られたことから、それぞれの講義において、その科目の習得目標を提示し、そこから先は初年次生全体が大学生としての自主的かつ積極的な学習活動を身につけるようなプログラム・課題を組んでいくことが必要となる。

現在の自分に身につけている能力についての意識では、女子が男子および他4年制女子より複数の項目で能力が身につけていると意識する割合が低かった。このことはH大学女子が自らを過小評価する傾向にあると考えられる。こうした学生が自己肯定感を持てるように、適度に困難な課題を提示し、それを乗り越える過程を評価することも必要である。

そして(3) 専門教育への橋渡しとなるような基礎的知識・技能の教育の側面である。調査結果より、大学入学前の生活体験において、女子が「自主ボランティアの経験あり」、「『福祉』に関する学習経験あり」という回答が少なかったことから、大学入学前に“福祉”をイメージする生活体験をしていないことが明らかになった。社会福祉の専門教育を受ける過程において、将来自分たちが関わる利用者がどのような状況にあるか、実際に目で見て知ることは重要である。そこで初年次において、教育課程の内外を問わずに学生が直接利用者と関わる機会を提供することが必要だと言える。

さらにH大学では男女ともに「友人・教員に自分の意見や考えをいつも伝えることができる」、「場の空気を読んで、話を早めに切り上げたり、内容を変えることができる」と認識している者が、その他の4年制大学生と比較すると少ないことが示された。社会福祉専門職の専門教育においてコミュニケーションは専門技術として教授されるわけだが、その基盤として、日常的なコミュニケーション能力が身につけていることが前提となろう。そこで初年次教育として、演習など少人数形式のプログラ

ムを設け、コミュニケーション能力の養成をしていく必要があると考えられる。

その他、初年次生が教育課程外においても学生としての主体的な生活様式や意識を身につけるための初年次生対象のオリエンテーションはもちろん、初年次生が上級生から学ぶことも多いと考え、サークル活動などをツールとして活用できるように、その運営を支援することも視野に入れていくことが求められる。

初年次教育プログラムの推進について、山田(2008:23)は「教授法にアクティブ・ラーニングをどう取り入れるか、初年次教育の進め方についての困難性は教員のFDにも関連しており、今後はFDの推進と合わせ鏡で初年次教育も進展させていかねばならない。」と述べている¹²⁾。初年次教育を展開していく上で、新入生の実態把握と、教員のFDの推進の強化が必要であると考えられる。

V 結 語

本研究は、社会福祉系大学新入生の初年次教育に資するため、学生の実態把握を中心に行った。その結果、調査対象学生全体の共通項や性別、大学別の傾向が明らかになった。しかし本研究や社会福祉系大学生の実態調査に関する先行研究¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾において、これらの研究は予備的研究の段階にあり、仮説探索型のため、基本属性と各設問項目との関連を検証するには至っていない。

今後の課題として、基本属性と各調査項目の関連性を検討することや調査項目の改編を行い、社会福祉系大学生全体の实態調査を深めてゆきたい。

謝 辞

本研究に参加協力して下さった皆様、調査に快く回答して下さった社会福祉系大学新入生の皆様に、心より感謝の意を表する次第である。

文 献

- 1) 文部科学省, 平成21年度学校基本調査速報
- 2) マーチン・トロウ, 天野郁夫, 喜多村和之訳, 高学歴社会の大学: エリートからマスへ 東京大学出版会, 1976
- 3) 川嶋太津夫, 初年次教育の意味と意義, 濱名篤, 川島太津夫編著, 初年次教育 歴史・理論・実践と世界の動向 丸善株式会社, 1-12, 2006
- 4) 杉谷祐美子, 日本における初年次教育の動向, 濱名篤, 川島太津夫編著, 初年次教育 歴史・理論・実

- 践と世界の動向 丸善株式会社. 69-79. 2006
- 5) 鈴木幸江. 歯科衛生士における初年次教育とリメディアル教育. 湘南短期大学紀要. 17. 35-41. 2006
 - 6) 牧田光代, 村山伸子, 西原康行, 丸田和男. 地域と協働したQOLサポーター育成: 初年次教育からの保健・医療・福祉連携教育システムづくり (新潟医療福祉大学における保健医療福祉専門職間連携教育の実践と将来 (2001-2006)). 新潟医療福祉学会誌. 6 (1). 168-174. 2006
 - 7) 倉田知光. チーム医療の基盤を築く全寮制初年次教育. 大学と学生 (特集 大学施設・設備の活用). 58. 47-52. 2008
 - 8) 川廷宗之. 社会福祉専門職養成教育における初年次教育の課題. 人間関係学研究: 大妻女子大学人間関係学部紀要. 8. 135-146. 2006
 - 9) 平成19年度日本学術振興会科学研究費補助金 [萌芽研究: 課題番号19653052 「社会福祉系大学生を対象とした初年次教育プログラム開発に関する予備的研究 (研究代表: 大妻女子大学・川廷宗之)]]
 - 10) M.Lee Upcraft, John N.Gardner, Betsy O.Barefoot. 再検討される大学の初年次. 山田礼子監訳. 初年次教育ハンドブック—学生を成功に導くために—. 丸善株式会社. 1-16. 2007
 - 11) 山田礼子. 監訳者序文. 山田礼子監訳. 初年次教育ハンドブック—学生を成功に導くために—. 丸善株式会社. vii-viii. 2007
 - 12) 山田礼子. 初年次教育の歴史と理論. 大学と学生 (特集 初年次教育). 16-23. 2008
 - 13) 山下匡将, 他. 社会福祉養成4年制大学の新生生の学習方法習熟度に関する研究—入試形態別の学習方法習熟度と入学後の不安を中心に—. 日本社会福祉教育学会要旨集. 3. 37-38. 2007
 - 14) 嘉村藍, 他. 4年制福祉系大学新入学生の生活体験および学習活動と学生生活に関する考察—新入生の変化を中心に—. 日本社会福祉教育学会要旨集. 4. 53-58. 2008
 - 15) 宮嶋淳. 社会福祉系学生の生活体験・学習活動・生活に関する一考察. 中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要. 9. 89-98. 2008

The actual condition and the First-Year Experience of the university freshmen of social welfare

Koh SHIMIZU^{*1}, Kanako YAMAMOTO^{*2}, Yasuhiro IKEMORI^{*1},
Akemi SHIMIZU^{*1}, Sonomi SATO^{*1}

* 1 School of Nursing and Social Services

* 2 Graduate school of Nursing and Social Services